

その二

嶺村法子

私たちの園では、四季折々の風を感じるために、月に一、二回は園外へ出掛けるようにしています。

月島から有楽町線を使ってクローバーやたんぼぼの咲く辰巳の森公園へ。さらに京葉線を乗り継いで葛西臨海公園に潮干狩りに。新しくできた大江戸線を使うと、緑豊かな浜離宮や神宮外苑にも乗り換えなしで行くことができます。

隅田川テラスをてくてく歩き、勝どき橋を渡って聖路加タワーに登ったり、川の向こうにある区立幼稚園やアスレチック公園を訪ねたり、はたまた、晴海埠頭から世界一周の旅に出る船の見送り

に行ったり、レインボーブリッジを眺めながら海風を受けて凧揚げをしたりもします。

中でも、江東区の江戸川総合レクリエーション公園は、水遊びのできるバラいっぱい西洋庭園あり、幼児にちょうどよいアスレチックあり、ポニーに乗れる広場あり、園内を走るかわいいシャトルバスありで、初夏の遠足にはもってこいの公園です。私たちの園でも、ここ数年四・五歳児一緒にバスに乗って出かけていました。

ところが今年、遠足予定日に複数の団体がすでに申し込みを済ませていて、ポニーにも乗れないし、アスレチックも混雑しそう…。そこで急遽、行き先を変更し、神宮外苑児童遊園（トリムスポーツセンター）に行くことになりました。

当日こちらは貸し切り状態で、アスレチックも遊び放題！隣接する芝生広場は、夏の間ビアガーデン（知る人ぞ知る森のビアガーデン、森ビ

トミカラひろげ

アッになるための工事中で入れませんでした
が、幼児用だけでなく、小学生向けのアスレチック
まで十分に楽しむことができました。

お弁当もそろそろ食べ終わり

ひとりふたりと片づけを始めた頃

誰かが「これなんだろう？」と

なにやら書いてある紙を見つけた

その紙には

○○グループのこどもたちへ

このちずをみて たからをさがせ

たからをぜんぶみつけたら

かえりにおやつをやろう

たからは やまのなかじゃ

おかしのいえのまじよより

と書いてあった

「ねえねえすごいことが

書いてある。ちよつと来

て来て」

魔女からの手紙が見つ

かったニュースは

お弁当を食べている子どもたちの間を駆け巡り

他の四つのグループも 年中のたんぼほ組も

競い合って手紙を見つけてきたのだが

子どもたちは そこではたと考えた

「どうしてグループの名前を知ってるんだろ

う」

「先生、魔女に教えた？」

「教えたりしないよ。先生は魔女とお友達じゃ

ないからね…あ、でもそういえば、昨日うみ組

の窓からカラスが見てたっけ…」

そこへ突然



ト・ミ・カラ じろば

ばさばさっと怪しいカラスが舞い降りてきた

「あ、魔女の家来だ！」

何というタイミングのよさ（カラスに感謝！）

魔女の手紙が一気に真実味を帯び

子どもたちの緊張が高まっていく

地図をもった子を先頭に

ムカデ競争よろしく友達の肩に手を置いて

そろりそろりと歩いている

「山の中って子どもだけじゃ行けないんだよ

ね」

「そうね。魔女に連れて行かれたら大変だも

ん」

子どもたちは互いに深くうなずき合い

「早く！ 先生早くお弁当食べてよ！」

とせかしてくる

こわごわと

長い滑り台のある山の横の



鬱蒼とした滝の前まで行ってみる

「あの暗い山の上の方が怪しい。勇気のある子

どもたちは探しに行こうよ！」

駆け上がっていくうみ組に

たんぽぽ組も続いていく

「あれ、何か光ってる！」

一個目の宝を発見

「先生取って…」「取ってごらんよ」

「先生あけて…」「あけてごらんよ」

「何か入ってるよ」「何だこれ…」

二個目も発見

「んー？ 何だかよくわからないよ…」

三個目発見

「あ、合う！」

「パズルだ！」

七枚の紙をつなぎ合わせると

トミカラひろば

きょうのおやつは あめじゃ

と言う文字が表れた

あまりの怖さで泣いていた

たんぽぽ組の子どもたちも笑顔になる

「魔女がアメくれるんだって！」

けれども：

待っても魔女は現れず

「魔女が嘘ついた」の大ブーイングの中

バスが発発

ところが：

「あれ、この袋、何だろう？」

バスの座席に怪しげな黒い袋があつて

中には

子どもたちの待ち望んでいたアメがどっさり

「見て、このアメなめると金色に光るんだよ」

金色の丸いアメを舌の上のにせて

互いに見せ合っているうちに

もう幼稚園に着いてしまう

出迎えの園長先生に

「魔女から手紙が来たんだよ」

「魔女がアメくれたんだよ」

と口々に報告

後日 子どもたちの遠足の絵には

あの日会えなかったはずの魔女の姿が

生き生きと描かれていた

ちよつと前、セーラームーンが一世を風靡して

いた頃、偶然をチャンスに変える生き方が好き

よくと歌われていたが、子どもたちの生活はまさ

にその連続だろうし、保育の仕事にも、この歌の

ような前向きな姿勢が求められるのではないかと

トミカラひろば

思う。

私には、娘が三年間の長きに渡って保育園で楽しんで（怖がって？）きた魔女探しの探検ごっこを、いつか幼稚園でもやってみたいという思いがあった。今回遠足の行き先を変えたことで実現のチャンスが訪れ、カラスに助けられて魔女の存在はぐつとりアリテイを帯びたものになった。

今ここで子どもとどのような世界を作り上げ、どのような楽しさを共有するかは、あたたためてきた思いや、その場でのひらめきといった保育者の感性によるところが大きい。同じ計画でも、別の保育者が投げかければ当然別の展開があり、それが保育の醍醐味でもあり難しさでもある。

保育者養成にかかわる先輩と話すとき、そのよきな感性に支えられた子どもへのかかわり方は、養成校で教えたり学んだりすることができるものなのかどうか、ということがいつも話題に上るの

だが…、それはさておき、久しぶりに仕掛人の楽しさを味わうことができた。

（中央区立月島第一幼稚園）

